

# 学校全体で取り組む、考え、議論する道徳科の構築

～ 道徳教育推進教師としての立場を通して ～

## I テーマ設定の理由

平成 30 年度に「道徳の時間」が教科化（特別の教科 道徳）され、道徳教育の量的確保と質的転換が図られた。つまり、児童に望ましい道徳性を養っていくためには、特定の教員が優れた実践を行うのではなく、全教員が足並みを揃えて「考え、議論する道徳」の授業を展開していく必要がある。そこで、本校では平成 30 年度から 2 年間、「多様な価値観を認め、自ら感じ、考え、伝え合う道徳の授業づくり」を主題として校内研修を行い、道徳科の授業改善に取り組んできた。効果的な研修を行うためには、中心となって情報を集めたり発信したりする教員が必要である。本研修では、道徳教育推進教師（以下、推進教師）がその役割を担い、様々な取組を行った。

推進教師を核とした取組を通して、本校では、学校全体で道徳の授業力の向上を目指した。また、取組を積み上げていく中で、本校オリジナルの「道徳スタンダード」が作り上げられていった。

## II 実践例

### （1）平成 30 年度の取組 【公開授業実践】【一人一授業・授業研究会】

#### ① 公開授業実践

年度当初に推進教師が公開授業を行った。公開に先立ち「考え、議論する道徳」についての本校の考え方をまとめ、その考えを反映させた授業を公開することにより、全教員の足並みを揃えることができ、以後の研修がスムーズに進行することにつながった。

#### ② 一人一授業（道徳）・授業研究会

年度内に全教員が道徳の授業を公開し、その授業は希望する教員が参観できることとし、授業後には必ず授業研究会を行った。この取組により、全員の授業力が向上するとともに、本校全体の課題が明確となった。

### 平成 30 年度の校内研修の課題

・児童の発言を引き出す教師の発問、または児童の発言に対する発問により、児童の考えの深まり方が大きく異なってくる。

### （2）令和元年度の取組 【代表授業・模擬授業】【授業研究会】【道徳スタンダード】

#### ① 代表授業・模擬授業

前年度から引き続き全教員が一人一授業を行い、その中でも低中学年のブロック代表者の授業を全員で参観した。代表者の授業については、推進教師が授業づくりの段階から関わり、情報の提供を行ったり授業者の相談に乗ったりした。

ブロック代表者の授業の前には、模擬授業を行った。模擬授業には全教員が児童役で参加した。模擬授業に参加することで、全員が授業のめあてを確実に把握し、見通しをもって本授業に参加することができた。また、授業後の研究会も視点が定まったものとなった。



模擬授業の様子

② 授業研究会

授業後の研究会の班別検討では、K J法を用いた。授業ごとに観点を二つ設定し、成果と課題・改善策を検討した。検討会で明らかとなった成果と課題は、推進教師が学年ブロックごとにまとめ、次の授業に生かせるようにした。

③ その他の取組

2年目は、学年ごとに道徳の時間を同一時間に設定し、各担当が授業を行うクラスを週ごとに変えていくローテーション道徳を全学年で実施した。推進教師は、1学期は全クラスの道徳の授業を参観した。授業後には、授業者と簡単な授業検討を行い、児童の実態把握と各教員が道徳に対して抱えている不安な点・疑問点などを把握した。2学期からはローテーション道徳に参加し、第1学年を除く全クラスで道徳の授業を行った。この取組により、校内研修の内容をより詳しく各教員に伝えることができ、ブロック代表者の授業づくりにも生かすことができた。

平成30年度、令和元年度の校内研修の成果

- ・ 授業の導入での問題提起、展開での基本発問・主発問、終末の振り返りの役割が明確になった。
- ・ 児童の発言に対する教員の問い返しの発問が整理された。
- ・ 全教員の道徳科への意識と授業力が向上した。

⑤ 道徳スタンダード

令和元年度に群馬県総合教育センターで道徳科の研修を行っていた研修員2名を加えて、2年間の取組の成果と課題をまとめる中で、令和元年度末に本校オリジナルの「道徳スタンダード」を完成させることができた。

(3) 令和2、3年度の取組 【道徳スタンダード研修】

完成した「道徳スタンダード」を用いて、年度始めに推進教師が講師となり、道徳の授業の考え方・進め方を説明した。この取組により、全校で足並みを揃えて質の高い道徳の授業を行えるようになるとともに、年度が変わり教員が異動しても授業づくりの考え方が統一された道徳の授業を行えるようになった。

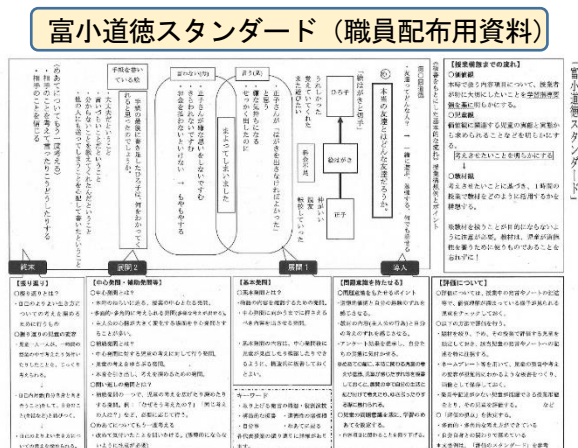
(4) 「道徳スタンダード」の内容

① 問題意識を持たせる。【導入】

事前に実施したアンケート結果を掲示して自分たちの実態に気付かせたり、道徳的価値と自分の経験のズレを自覚させるような発問をしたりして、児童に問題意識を持たせる。そして、児童の問題意識を基に、できるだけ児童の発言を引き出して学習のめあてを設定する。児童が感じたズレ等を板書しておく、展開の後半で物語の内容と自分の生活を結び付けて考えたり、児童の思考をゆさぶったりする際に触れることができる。

② 基本発問で物語の内容を把握させる。【展開前半】

物語の内容を確認するための基本発問は、中心発問に向かうまでに押さえるべき内容を必要最低限精選しておく。展開後半以降、児童が物語の内容を確認できるよう、基本発問で出てきた発言は構造的に板書しておく。



③ 中心発問で本時のねらいに迫らせる。【展開後半】

中心発問は、物語の中で主人公の心情が大きく変化する場面を選び、児童が多面的・多角的に道徳的価値について考えられるような発問を設定する。

④ 補助的な発問で思考を深める。【展開後半】

中心発問や振り返りの時間に児童の思考をさらに深めるために行う補助的な発問は、以下の二つに種類分けした。

- ・ 補助発問：児童の思考をゆさぶり、本音を引き出すために行う発問。中心発問とのセットで児童の反応を予想して事前に用意しておく。
- ・ 問い返しの発問：補助発問の一つで、児童の発言に対して必要に応じてその都度行う。「なぜそう考えたの？」などのように児童の思考をさらに深める発問と、「〇〇さんの考えについてどう思う？」などのように児童の意見を広げる発問に分けられる。

⑤ めあてについてもう一度考えさせる。【展開後半】

授業の導入で設定しためあてについてもう一度考え、自分の思考の変化を実感できるようにする。

⑥ 授業を振り返り、自分事として考えられるようにする。【終末】

自己の生活を振り返ったり、これからの生き方について考えられたりするような発問を行い、自己のよりよい生き方についての考えを深められるようにする。

### Ⅲ 研究の成果と今後の課題

「道徳スタンダード」を基にして全校で授業を行った令和2年度末に、学級担任にアンケート調査を行った。「道徳スタンダード」を用いた取組の成果と課題は次のとおりである。（一部抜粋）

#### （１）研究の成果

① 授業の進め方に対する不安感が減った。

令和2年度の年度始めの研修では、教科化して日の浅い道徳の授業をどのように進めたらよいのかと不安感をもっている教員が半数以上いた。「道徳スタンダード」があったことで基本的な授業の流れが明確になり、不安感の解消につながったと考える。

② 児童の本音を引き出したり、多角的な意見を引き出したりすることができるようになった。

児童の発言に対する教員の問い返しの発問を整理したことで、事前に児童の反応を予想して発問を考えておいたり、予想していなかった意見にも対処したりすることが行いやすくなった。そのことで児童の思考が深まり、本音や多角的な意見を引き出すことにつながったと考える。

#### （２）今後の課題

① 問い返しの言葉を集めて、整理すると使いやすい。

「道徳スタンダード」では問い返しの発問を分類して、具体的な発問をいくつか例示したが、各授業では授業者が基本的な考え方を基にして発問を考えていた。具体的な発問を集めておき分類して整理しておけば、特に若手の教員の参考になるであろう。

② 「議論」とまではいかなかった。

中心発問や振り返りの時間に教員をファシリテーター役として全体で思考を深める展開を目指したことで、意見の出し合いに終始してしまうことはなくなったが、「議論」にまで高めていくのは難しいと感じた教員が多くいた。「議論」を行うには、児童同士の交流がなくてはならない。今後も「道徳スタンダード」を基にした授業を続けていくことで教員の道徳の授業力が向上し、児童同士の思考をつなげられるようになり、「議論」に発展させることが可能になると考える。